

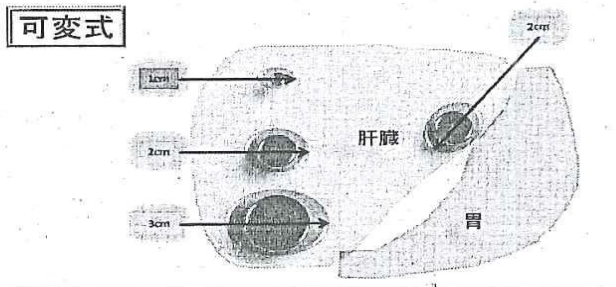
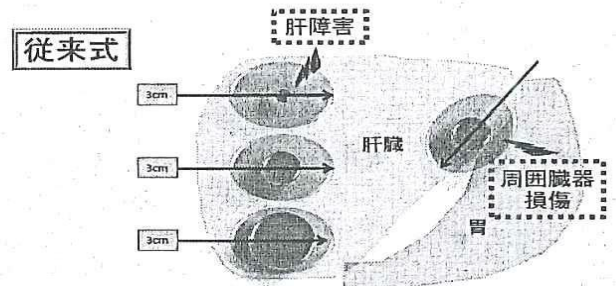
肝臓がんの治療の一つに、特殊な針を皮膚の上から刺し、がんを焼いて壊死させる「ラジオ波焼灼術」がある。製鉄記念室蘭病院(前田征洋病院長)は昨年9月に、「可変型ラジオ波焼灼装置」を導入した。この装置は焼灼範囲が従来より細くなつたため、正常な組織への熱の伝わり過ぎを最小限に抑えることも可能。体の負担が非常に少ない(同病院)という。

肝臓がんの治療方針は、腫瘍の個数や大きさ、発生部位などの条件と、患者さんの肝機能の組み合わせなどで決まるといふ。ラジオ波焼灼術は、肝切除手術、カテーテルから腫瘍への栄養血管に抗がん剤などを注入して血流を遮断する肝動脈化学塞栓療法とともに、標準的治療の一つになっている。

ラジオ波焼灼術は、ポールペン先ほどの太さの針をわき腹から刺し、針

製鉄記念室蘭病院の「可変型ラジオ波焼灼装置」

腫瘍狙い撃ち可能
体への負担少なく



先から熱(ラジオ波)を発生させて、がんを壊死させる治療法。超音波やコンピューター断層撮影装置(CT)の画像で、がんを確認しながら進め

るが、針先からの熱が周辺臓器の異常が無い箇所にも広がり、結果的に焼灼の必要がない箇所も焼いてしまう課題もあった。

また、原発性肝がんだけでなく、転移性肝がんの治療を可能にしたほか、複数の方向から針を入れて焼灼したり、事前に肝動脈化学塞栓療法を併用することで、5センチ程度までの腫瘍の治療についても、ラジオ波焼灼術の対応を可能にした。

同病院によると、同装置の導入は道内2カ所目で道南地域では初。西胆振管内の肝臓がん治療を支えている。

(松岡秀宜)